

はしがき

本報告書は『2015年SSM調査シリーズ』の第6巻にあたり、労働市場に関わる論文を収録している。社会階層論があつかう中心的な問題である「財や報酬の格差・不平等」を理解する上で、労働市場への着目は不可欠だといえよう。二重労働市場、日本的雇用慣行といった労働市場それ自体の分析はもちろんのこと、学校から仕事への移行といった労働市場への参入、そして、女性や高齢者の労働市場からの退出といった問題の解明も、社会階層論において探求すべき重要なテーマである。本報告書の各論文は、労働市場に着目しながら、ライフコースのさまざまな場面で生起する格差や不平等について明らかにすることを目指している。

60年にもおよぶSSM調査の歴史をふりかえると、労働市場に着目した分析は数多く行われてきた。これらと比較すると、2015年SSM調査を主に分析した本報告書は3つの特徴があるといえるだろう。1点目は、今回のメインテーマである「少子高齢化社会における階層構造の解明」である。本報告書でも、多くの論文がSSMの特徴といえる職歴データをもちいて、今回、対象年齢が引き上げられた高齢者に焦点をあて、高齢期における格差・不平等の解明を試みている。そこでは、労働市場からの退出、高齢期におけるWell-being、所得・資産の格差などについて、職業キャリアにおける地位や経験が高齢期の生活状況に強い影響を及ぼしていることが明らかにされている。

2点目は、「1990年代以降の労働市場の変容」に焦点をあてた分析である。もちろん、前回の2005年SSM調査でも、「雇用の流動化」や「若年非正規雇用」といった問題が重要なテーマになり、すでに多くの研究成果が蓄積されている。ただ、2005年からの10年間で、雇用の流動化はもちろんのこと、サービス産業化や少子高齢化もさらに進行している。このあいだの時期を含むデータをもちいることで、1990年代以降の労働市場の変容をより詳しく把握することが可能になったといえるだろう。また、2005年の時点では、1990年代以降の時期に労働市場に参入したコーホートは全サンプルの中では数が少なく、そのことが詳細な分析をする際にハードルとなっていた部分もあった。今回は、これらの追加されたデータを活用することで、多くの論文が1990年代以降の労働市場の変容に焦点をあて、階層構造の解明を試みている。

そして、3点目は、「労働市場とジェンダー」という視座である。本報告書のいくつかの論文は、女性の職歴をもちいて、職業キャリアや職業継続、看護職に焦点をあてた分析を行っている。「ジェンダーと階層」は、調査対象に女性が追加された1985年SSM調査以来、関心をもたれてきた問題であり、今回の新しい特徴とはいえない。しかし、先にあげた高齢期の階層構造、そして1990年代以降の労働市場の変容に焦点をあてたほとんど論文が、ジェンダーによる傾向の違いを明らかにしており、労働市場分析におけるジェンダーという視座の重要性があらためて示されたといえるだろう。

21世紀は、少子高齢化がまちがいなく進行し、雇用の流動化や女性の労働市場への参入もさらに進む時代になることが予想される。こうした時代において、労働市場に着目する本報告書が、現代日本の階層構造の解明に重要な知見を与えることを期待したい。

2018年3月

阪口 祐介